

平村 英寿氏の学位論文審査の要旨

論文題目

希死念慮および自己破壊行動の心理社会的関連要因に関する実証研究

(Empirical study on psychosocial correlates of suicidal ideation and self-destructive behaviors)

1998年の自殺率の急上昇以降今日まで(2008年)わが国の年間自殺者数は依然として3万人を超えた状態が続いている。自殺予防は現代日本の抱えた喫緊の課題である。既遂自殺には希死念慮が先行し、自殺企図(自殺未遂)のエピソードを経て、最終的に自殺の既遂にいたることが知られている。そこで、本研究では希死念慮と自殺企図について、学生集団、地域住民、臨床集団について検討を加えた。

研究1では、大学生集団を対象とした追跡調査により、ネガティブライフイベント(ストレス状況)が直接に状態希死念慮を導くというより、自動思考を経由した抑うつ感情から導かれることと、さらに抑うつ感情を迂回して、自動思考から直接導かれる経路があることを、構造方程式モデル(共分散構造分析)の手法を用いて証明した。

研究2では、青年期の希死念慮について児童期の体験と境界性パーソナリティ傾向に焦点をあてた縦断的研究を行った。その結果、児童虐待や被養育体験は青年期の希死念慮に直接影響するのではなく、境界性パーソナリティ傾向を経由して希死念慮が維持されることが明らかになった。

研究3では、年齢・性別で層別抽出された多数例の地域住民データによる横断調査を行った。ソーシャルサポートおよび地域活動への参加が心理的リソースによい影響を与え、それが希死念慮発生を抑制する可能性があった。

研究4では、入院患者を退院後6カ月時点まで追跡し、その自殺関連行動予測変数を求めた。予測因子が、若年、女性、高い新奇性追求(気質要因)、過去1年間の希死念慮の頻度であることが明らかになった。加えて、患者自身の予想は予測力に乏しいことが明らかとなった。

審査の過程において、希死念慮の概念規定と測定方法、使用した尺度(特に希死念慮)の妥当性、構造方程式モデル(共分散構造分析)の手法の詳細、パス・モデルの可能性のある代案、年齢層ごとの希死念慮関連要因の特徴等について、様々な質疑応答が交わされ、申請者より概ね適切な回答と考察が得られた。

本研究は、社会問題となっている日本の自殺について、その心理社会的発生機転を明らかにし、(1)希死念慮の発生プロセスに必ずしも抑うつ気分を経由しない経路もあること(2)希死念慮の生成に被虐待体験から導かれる境界性パーソナリティ傾向が関与すること(3)地域住民の希死念慮低減に地域活動への参加が有効である可能性があること(4)患者の希死念慮が以降の自殺企図予測にはあまり有効でなく、むしろ過去の自殺関連行動が重要であることを明らかにした。これら所見は今後の臨床及び地域健康政策に寄与するところが多く、学位の授与に値すると評価した。

審査委員長 公衆衛生・医療科学担当教授

加藤 貴彦

審査結果

学位申請者： 平村 英寿

専攻分野： 臨床行動医学

学位論文名： 希死念慮および自己破壊行動の心理社会的関連要因に関する実証研究
(Empirical study on psychosocial correlates of suicidal ideation and self-destructive behaviors)

指導： 北村 俊則 教授

判定結果：

㊦

不可

不可の場合：本学位論文での再審査

可

不可

平成 22 年 2 月 8 日

審査委員長

公衆衛生・医療科学担当教授

加藤 貴彦

審査委員

生命倫理学担当教授

浅井 篤

審査委員

保健学教育部看護学分野担当教授

上田 公代